

ロレンスの非西洋性

D.H. Lawrence's Non-Western Ideas

中山本文

Women in Love が自己と偉大なる知られざる者 (the Unknown) との一致に基づく「真の自己」の探求の物語であるかを明らかにするために、“The Two Principles” や *Fantasia of the Unconscious* といった評論、E. Delavenay の E. Carpenter によるロレンスへの影響に関する論考、西田幾多郎の『善の研究』などを参考にしながら、ルネッサンス以来の近代化が培ってきた自己意識がどのように個人の内面を規定しているかを検証した。グラマースクールの教師 Ursula は伝統的な愛の観念を捨てられずに Birkin の心を捉えられない。Birkin 以外に友人のいない炭鉱経営者の Gerald は何か対象に対して支配の意志を振るっている時だけしか自分の存在に自信が持てない。地位も富もあり、知的生活においても非の打ち所のない裕福な家系の Hermione は知識という鎧に自分の存在を守られているが、心の空洞に怯えている。それぞれの人物の詳細な考察によって、内面を拘束している自己意識が他者を遠ざけ、結局、自己が自己にとどまり、他者との、そして大いなる存在との関係を成就できないという実態を明らかにした。Birkin/Lawrence は、自己の内なる “a beyond” に目覚めた新たな個 (“a new One”) が新たな一体性 (“a new oneness”) を築き上げることに自己の再生、「真の自己」の復活を期待していた。

Keywords : 自己の呪縛、無意識、自己の放棄、関係、一体性

目次

I 序

II 自己意識の呪縛

1. Ursulaの観念的意識
2. Gerardの意志的意識
3. Hermioneの知的意識

III 結語

I 序

西田幾多郎の『善の研究』が、実は「真の自己」の研究であったように、ロレンス文学が目指したのも「真の自己」の追究であった。彼の、特に、中期以降の作品は如何にして自我の覆いを剥ぎ取った自己に目覚めるかを模索している。西田の研究が老荘思想や禅仏教の叡智を受け継いだものであることは自明であるが、ロレンスも少なからず仏教思想や道教思想の智慧に目を開かれている。

ロレンスの作品に仏教や東洋思想の影響が垣間見えるようになったのは、彼が当初 *Sisters* として着想した物語を *The Rainbow* と *Women in Love* に分け、*Women in Love* (以下、*Women*) の初稿を執筆していた頃である。この物語の内容を検討すると、ロレンスがこの時期に仏教や東洋思想に触れていたという E. Delavenay の指摘¹ は正当性がある。現に、最終稿の *Women* の *Chairs* という章と *The First Women in Love* (以下、*The First*) のその該当箇所を比較するとその当時の彼の思いが伝わってくる。結婚を決意した Birkin と Ursula の二人が自分たちの将来について語っている場面である。決定稿では “... we'll wander about on the face of the earth,” ... “and we'll look at the world beyond just this bit.” (362) となっているのに、*The First* では “Meditate and write— and teach about truth..., the happy, creative, contemplative life” (332) と彼が Ursula に答えている。如何にも仏教の僧侶である。決定稿ではこの部分は修正されているが、彼が仏教的世界²への関心を持っていたことを示す一例である。この他にも物語の随所に仏教や老荘思想の影響を窺がわせる個所が散在している。

本稿では、*Women in Love* の主要な登場人物たちの自己の現実がどのように描写されているかを詳細に検証することによって、ロレンスの求める自己がどのような方向に向かい、どのような変容を迫られているかを明らかにする。

II 自己意識の呪縛

1. Ursula の観念的意識

まず、この物語の展開に中心的な役割を担っている人物、Ursula に注目する。彼女と、物語の主人公 Birkin が結婚することの意味について、お互いの立場を主張する場面が *A Chair* という章にある。彼女は、“It's one way of getting rid of everything.” (362) と言って憚らないが、彼の考えは彼女のそれとはまったく異なっている。彼にとって結婚は二人だけに閉じこめるのではなく、むしろ逆に開かれた世界に通じる入口である。— “... one way of accepting the whole world.” (362) 故に、彼は友人の Gerald を求め、Ursula の妹 Gudrun も仲間の一人として仲間に入れようとする。到底、西洋近代人の自己の意識に取りつかれている Ursula に受け入れられ

るはずはない。— “You've got me,” ... “Why should you *need* others? 常に「私」という基盤に立ってものを考え、行動することが当たり前彼女の彼女には、彼の言う世界は容易に受け入れ難い。執拗にその世界で生きることを求める Birkin に不安すら覚えるのは、むしろ仕方がない。

Mino という章は結婚の一極性と、その否定についての Birkin の考えを知る手がかりを与えてくれている。Ursula が Birkin の自分への愛を確かめに彼の家を訪ねる時のことである。彼女が彼に “Don't you think I am good-looking?” という彼女に、視覚的認識の問題じゃないと反発する場面がある。恋人どうしの他愛のない恋の駆け引きだと片付けることもできるが、やはり Birkin の人格を考えると、安易な即断はできない。彼は視学官の仕事についているが、実際、仕事をしている場面は一度しか描かれていない。Class-room という章で Ursula の授業を視察したこと以外、仕事らしい仕事は全くやっておらず、現実感に欠ける。どうも、彼のこの物語における仕事は作者の思想の実験にありそうだ。実際、Gerald や Ursula は彼の考えを吟味をする立場に置かれ、彼の考えを聞かされる度に、疑問視したり、ためらったり、不快感をあらわにしたり等、世間的な反応をしている。

Ursula は自分の美貌が彼の心を捉え、それが二人を結びつける大きな要因であると信じて疑わない。しかし、Birkin は彼女の視覚的美には何の興味もない。美は表層の特徴であって、何ら人間存在の核心に触れるものではない。彼が “I don't want to see you. I've seen plenty of women, I'm sick and weary of seeing them. I want a woman I don't see.” (147) と、如何にも、もううんざりだという態度で彼女に抗弁するのは、Hermione をはじめ、これまで接した女性たちが本質的なところで彼を捉えることがなかったという、苦々しい体験が元になっている。美が、Plato の云う、内なるものの反映とは違って、単なる表面の偶然の出来事にすぎないのに、如何にも自分が何か特権でも持っているかのように振舞っているところに Birkin の「苛立ち」の原因はある。

更に、この二人の口論は宗教的な世界へと発展する。彼が何を求めてどこに向かおうとしているのが暗示されていて、実に興味深い。再び、二人の議論に立ち入ってみる。

“But don't you think me good-looking?” she persisted, in a mocking voice. He looked at her, to see if he felt that she was good-looking. “I don't *feel* that you're good-looking,” he said. “Not even attractive?” ... Don't you see that it's not a question of visual appreciation in the least,” he cried. “I don't *want* to see you. I've seen plenty of women, I'm sick and weary of seeing them. I want a woman I don't see.” ... “you are invisible to me, if you don't force me to be visually aware of you. But I don't want to see you or hear you.” (147)

Birkin が “invisible” や “visually” で何を含意しているかは明らかである。彼の期待は、彼女が視覚的な意志を振りかざすことをやめ、非視覚的な「見えない女」になってくれること、この一点に尽きる。故に、非視覚的な判断を重視する。彼の持つ何か非視覚的な尺度は彼を「彼女が美

しいと感じるかどうかを確かめる」(“to see if he felt that she was good-looking”)という行為に向かわせる。彼には相手が“invisible”かどうかを嗅ぎ分け、そこに信を置いて生きることのできる人間の資質が備わっている。“I don't *feel* that you're good-looking”という彼の反発は、彼女の外的な特徴を示す“good-looking”が彼の内なる鏡に映っていないという事実を物語っている。と同時に、Ursulaの表面の“good-looking”が何ら内奥の魂とつながっていないという、彼の内奥の声の叫びである。更に、説得するかのように言うこの一言 — “you are invisible to me, if you don't force me to be visually aware of you.”には、人が“invisible”から“visible”に変質してしまうその原因が、無理やり視覚的な認識を押し付けようとする当人の意志にあるという、強い批難が込められている。“I don't want to see you or hear you.”の“see”も“hear”もともに外的な表層の認識であり、その否定はBirkinが根ざす世界の性質を物語っている。

彼の“*feel*”、すなわち直感的認識へのこだわりは、西田が唱道する、あの「純粹経験」(30)³を思い出させる。表層の認識から離れられない彼女が世間的・世俗的な存在を代表する一人として描かれているのは間違いない。Birkin/Lawrenceの、人間の“invisible”な側面へのこだわりは強く、物語の核となっている。しかし、問題はBirkinの執着がどこから来るのか、彼の内なる何がこのようこのように彼を突き動かすのかという点である。自分の言うことに一向に耳を貸そうとしないUrsulaに、どうにかしてわからせようとして彼女に示す彼の思念の世界は合理的知性が受け入れることのできる領域を超えている。彼は思考の泉の奥深くに息づく秘密の断片を取り出して見せる。 — “there is a beyond, in you, in me, which is further than love” (146) や “there is,” ... “a final me which is stark and impersonal and beyond responsibility. So there is a final you.” (146) Ursulaの頭の片隅にもなかった考えである。どこか、仏教でいう彼岸を思わせる“a beyond”は、彼の求める境地の性質を暗示している。しかし、注目したいのは、“a beyond”が我々一人ひとりの内にあるという点である。そこは、“a final me”や“a final you”や“impersonal”が示すように、個人の感情や意識を超越した、ある意味で本来の生のありように目覚めた人の境地である。一人称の様々な属性を剥ぎ取った“final,” “impersonal,” “inhuman,” “strange,”といった形容詞や“the unknown”という名状しがたいものの存在、云わば、大いなる三人称の存在を表す言い回しは、彼がぼんやりと感じ取っている未知の生の領域の特徴を明らかにしている。彼は自分というものの存在以外に“the unknown”の存在を認め、そこに自らを委ねている。 — “I deliver *myself* to the unknown in coming to you, ... stripped entirely into the unknow. (147) そして、そこに止まらずにUrsulaにもその世界の住人になってくれることを切望している。しかしながら、既知の世界の枠を超えることなど思いもよらない通常の人間が容易に受け入れられる境地ではない。しかも、Birkinによれば、そこに辿り着くためには「すべてを捨て、自分自身も捨てる」(“cast off everything, cast off ourselves”, 147) 必要がある。とても理知的な知性・合理的な存在様式が染みついた者たちが近づける境地ではない。しかし、UrsulaやHermioneとの議論で明らかのように、人が「真の存在」を獲得する道はそこにしかないと彼

が信じているのは確かである。

また Birkin の更なる次の発言は、「私」の垢がこびりついた Ursula の問題を手厳しく批判している。

I want you to find you, where you don't know your own existence, the you that your common self denies utterly. But I don't want your good looks, and I don't want your womanly feelings, and I don't want your thoughts nor your ideas," ... (147)

ここでやり玉に挙げられているのは、伝統的な愛の観念に捉われた彼女自身であり、“common self” を抜きにして人間関係を考えられない彼女の存在様式である。彼女の“common self” が容認できない、正にその「別の Ursula」を彼は求めている。愛の観念に捉われた彼女ではない。しかしながら、彼にはその「別の彼女」を“something much more impersonal and harder” (145) と言うしかなく、彼女を納得させる言葉を見つけることはできない。彼は意地になって、繰り返す。— “I don't feel the emotion of love for you.” ... “love gives out in the last issues.” (145) たとえ愛と言えども、感情というものはついには気体と同じように、跡かたなく消えてしまうものだ。懸命に彼女の思考の道筋に新たな方向を与えようとする。このように、彼が愛を徹底して否定する理由は、彼女が信じて疑わない愛という観念の持つ特性にある。当然のことながら、自分のこれまで信じて生きてきた足場を否定されたくない Ursula は、“love includes everything” と反論する。しかしながら、彼女のこの必死の抵抗も、“impersonal” / “inhuman” な世界に新たな生の可能性を信じている Birkin には“sentimental” (147) にしか響かない。彼にとっては、かつて Hermione の自分への愛がそうであったように、Ursula が自分に向ける愛も同じく、相手の自由を奪う、束縛の感情に過ぎないからだ。

If you are walking westward,” he said, “you forfeit the northern and eastward and southern direction. — If you admit a unison, you forfeit the possibilities of chaos.” (152)

ここに暗示されているのは愛の個別性、すなわち、愛の一人称性である。この性質は、“a final me” / “a final you” を見出すことのできる“a beyond”の世界を遠ざけることはあっても近づけることはない。彼の考えでは、我々が慣れ親しんでいる愛はお互いを閉じ込めるだけで、他の可能性を排除する。— “Love is a direction which exclude all other directions. It's a freedom together, if you like.” (152) 愛の排他性が感情的な次元を超えて“inhuman”な個を獲得することを不可能にしている。人間は視覚的な現象の世界だけを生きるのではなく、もっとその奥にある見えざる世界に根差すべきだという強い思いがこの言葉にこもっている。しかしながら、彼の思い描く世界と現実の隔たりは大きい。

“Only nobody takes the trouble to be essential.”... the world is only held together by the mystic conjunction, the ultimate unison between people — a bond. And the immediate bond is between man and woman.” (152)

「つながり」によって世の中は成り立っているという考えや、“impersonal” / “inhuman” な自己の希求、そして様々な欲望を捨ててすべてを“the unknown”に任せるといった考えは極めて仏教的である。ここに示されている Birkin の世界認識はすべては何らかのつながりの中にあるという仏教の縁起説や、密教の大日如来を中心とする「曼荼羅」的な宇宙認識と大きく離れてはいない。それにしても、Birkin/Lawrence の次の発言は個人主義文化に生きてきた人のものとは思えない。

“One is committed. One must commit oneself to a conjunction with the other—forever. But it is not selfless — it is a maintaining of the self in mystic balance and integrity — (152)

ここに開示されている世界は容易に Ursula が歩み寄れる境地ではない。極めて東洋的な世界観である。個人対個人の結合と、更に何か未知の存在と一つになるという考えは西田も『善の研究』で追求している。彼はまず、その自己の全体性を獲得する第一歩として「無私」になることの必要を説く。「無私」とは、もちろん、自分が無いことではない。「私」が中心ではなくなる状態のことで、決して「私」の消滅を意味しない。敢えて言えば、日常の表層意識の消滅である。その達成があって、対象と一つになること、すなわち、一体化が可能になる。自分と対峙する対象が単なる他者としてあるのではなく、自分との境界線がなくなり、自分と一つになる。他者も自分もそれぞれ自分というものを保持しながら、異なる自分のままで「共鳴」・「共振」する。この境地が達成された時、「私」が深化し、更にこの「主客合一」(374) から「神人合一」(396) に達すべきものと西田は考えていた。「無心」(無意識)の世界に参入する時、我々は理知・知識の世界の境界線を越え、自他の区別がなくなり、他者のことはそのまま自分のことになる。そしてその段階を越えて「神人合一」に達した時、真の自己が顕れる。禅の思想の反映である。

自らの内なる“a beyond”に目覚め、“the unknown”とのつながりに自らを委ねるという考えはキリスト教思想の洗礼を受けている Ursula の理解を超えている。既成の枠を超えて、何か新しい存在様式を見出そうとする Birkin の思いは彼女には通じない。物語の終わり近くには彼の考えに理解を示すようになってはいるが、やはり、個人として以外に自分のことを考えたことのない Ursula にとって、自分を捨てて、本来の自分を獲得するという境地に達するのは至難の業であると言わざるを得ない。

2. Gerald の意志的意識

Birkin が強い関心と期待を抱いている人物が Gerald である。彼は地位もあれば富もある。ドイツで教育を受け、軍隊に入り戦争に行ったこともある。最近では採炭の知識を修得し、目の前にある自然に立ち向かおうとしている。Ursula の目には数世代分の若さをわがものにして生きているように映る。— “He is several generations of youngness at one go.” (48) 着こなし、身ごなし等、見るからに一部の際も感じさせない男である。周囲に与えるそういう外見の印象とは裏腹に、母親が嘆くように、彼には Birkin を除くと一人の友人もいない。気が沈んだ時などはいつも Birkin に助けを求める。ここでは Birkin や Ursula に劣らず重要な役割を担っており、冒頭から終章までその存在感は際立っている。彼の存在の本質に関わるような場面が Shortlands という章にある。

Gerald の妹の結婚式が行われるその当日、教会の入り口での思いがけない新郎新婦の追い駆けっこ— 新婦が逃げ、新郎が追い駆ける— の場面を巡る Gerald と Birkin の議論である。

“— who began it?” Gerald asked.

“We were late. Laura was at the top of the churchyard steps when our cab came up. She saw Lupton bolting towards her. And she fled. — But why do you look so cross? Does it hurt your sense of the family dignity?”

“It does rather, said Gerald. If you're doing thing, do it *properly*, and if you're not going to do it *properly*, leave it alone.”

“Very nice aphorism,” said Birkin. ... (32)

この “do it *properly*” という言葉は彼の背景にあるものと、それによって築きあげられた現在の彼自身をよく表している。二人が繰り広げた無邪気で、衝動的な「駆けっこ」が “proper” ではないとする Gerald の反応は間違いなく、品位・体面を重んじる貴族階級に属する人間の観念化された世俗的・世間的な価値観からきている。その点で自由で身軽な Birkin の茶化すようで、どこか本気なような態度は Gerald と対照的である。Gerald の発言に反旗を翻すかのように、自説を展開する Birkin とのやり取りが以下のように続く。

“— I want them (i.e. people) out of the way, and you're always shoving them in it.” ...

“You don't believe in having any standard of behavior at all, do you? He challenged Birkin, censoriously.

“Standard — No. I hate standards. But they are necessary for the common ruck.— Anybody who is anything can just be himself and do as he likes.” (32)

世の中には“standard”がなくてはならないと固く信じている Gerald と、その必要性に否定的な Birkin。どうやら、二人の間に掛ける橋はなさそうである。彼は Birkin が口にした“be himself”の真意を掴みかねているが、そういう彼を納得させるかのように述べた次の発言は更に彼を混乱させる。Gerald に待っていたと云わんばかりに、次のように捕捉する。

“I mean just doing what you want to do. I think it was perfect good form in Laura to bolt from Lupton to the church door. It was almost a masterpiece in good form. It's the hardest thing in the world to act spontaneously on one's impulses —” (32)

Birkin が今執着している考え、「自分がしたいことをする」(“doing what you want to do”)や「自己の衝動に従って自発的に振舞う」(“to act spontaneously on one's impulses”)ことなどは Gerald には考えも及ばなければ、到底受け入れられない。一方、彼と違ってボヘミアン的な性質を多分に持っている Birkin はこれこそ今、世の人々に実行してほしいと本気で思っている。社会的な存在である人間であれば、Gerald に限らず誰の場合でも「自分自身」である前に、まず「社会の基準」がある。従って、「自分」というものを置き去りにせざるを得ない場合が少なくない。Birkin の不満は社会の基準を優先させて「衝動に従って自発的に振舞う」ことが出来なくなってしまっているところにある。従って、Birkin の目下の願いは人々が「自己の衝動性」に目を開かれ、世の中の行き詰まりを打ち破る原動力になることである。Birkin は秩序を解体しようと目論むが、反対に Gerald は秩序の維持を第一と考える。Gerald には、この「基準」という安全弁がなかったら、安心して暮らすことはできない、命すら落としかねないという不安がある。しかし、Birkin の視点はそこにはない。

彼の貴族精神が彼の判断の基盤になっている状況を表している場面が Fetish という章にもある。Gerald が Birkin の友人のフラットで目にした、半かがみの姿勢で子供を産もうとしている妊婦を模した古代のアフリカの木彫りの彫像 (... the carved figure of the negro woman in labor. Her nude, protuberant body crouched in a strange, clutching posture, her hands gripping the ends of the band, above her breast. (78)) について Birkin に意見を求めるところである。どこから見ても洗練と品位を欠くこの像に対して相手も自分と同じ感想を持つだろうと期待した Gerald だが、予想外の答えが返ってくる。— “It is art.” (78) と。自分の知的・文化的・常識的な判断に何も疑問を持たない Gerald には納得できない。それでも一步譲って、自分の芸術観を否定されまいとして、こう反論する。— “But you can't call it *high* art.” (79) この発言の中にある“*high*”という、彼を支えている背景から出てきたこのひと言は貴族社会で生まれ育った Gerald の文化的な価値観の顕れである。つまり、この判断を下しているのは彼自身ではなく、彼の知的意識なのである。彼を閉じ込めている社会のヴェールに彼の目は覆われている。ものの見方・判断の基準が外観に在って、表象の奥にある真実にはない。それに対して、Birkin は高尚ではな

いかかもしれないが、“It conveys a complete truth” ... “Pure culture in sensation, culture in the physical consciousness, really *ultimate* physical consciousness, mindless, utterly sensual. It is sensual as to be final, supreme.” (79) と、非視覚的・非意識的な評価を下す。

彼の“the physical consciousness, really *ultimate* physical consciousness” といった評言は築きあげられた伝統文化に何の疑問も抱かずに、むしろ安心と居心地の良さを感じて生きている Gerald からは出てこない。その伝統を打ち壊して、新しい息吹に包まれて生きて行きたいと強く願っている Birkin との明らかな違いが露になっている。

Art and Morality というエッセイに Gerald の限界と Birkin の見識を知る手掛かりとなる箇所がある。

Egypt had a wonderful relation to a vast living universe, only dimly visual in its reality. The dim eye-vision and the powerful blood-feeling of the Negro African, even today, gives us strange images, which our eyes can hardly see, but which we know are surpassing. ... The African fetish-statues have no movement, visually represented. Yet one little motionless wooden figure stirs more than all the Parthenon frieze. (525-6)

ここには作者の芸術観の真髄といってよいものが提示されている。彼は現象の奥にある、いわばそれそのものの持つ生の躍動といったものを感じ取っている。それほど彼の感性は鋭敏で、しなやかで、外に開かれている。硬直して、自分のうちに狭く閉じた感性の持ち主には遠く手の届かない世界である。視覚の魔力に取りつかれている Gerald に対して、視覚化されない“the powerful blood-feeling”や、動きのないものの奥にうごめく「血の躍動」の世界への理解の扉は固く閉じられている。Gerald は明らかに、視覚的・世間的な価値観から逃れられない Ursula の同類である。

このような Gerald であるが、彼が取り付かされている社会意識から解放される瞬間がある。Gladiatorial という章の、二人が夢中になって汗を流した Japanese wrestling (268) の場面である。注目したいのは、この時、二人が上半身裸になることである。Breadalby で、Birkin が Hermione の攻撃をかわして森に逃げ込み、草花の上を転げまわった時、まず彼が衣服を脱ぎ捨てた場面を思い出す。更に、裸になる場面は Fetish という章にもある。Birkin たちが泊まった友人のフラットでの出来事である。彼の信奉者と思われる二人の男たちが素っ裸で暖炉の前に立っている。上述の二つの場面は植物の生命の躍動に直に触れたり、炎のぬくもりを直に肌を感じたり、それぞれに日常の意識的な自己を忘れていた行為者たちの様子を伝えている。彼らは衣服を脱ぐことで、社会的意識を脱ぎ捨てたのだ。以下は二人が没頭した格闘の様子である。

... they wrestled swiftly, rapturously, intent and mindless at last, two essential white

figures ever working into a tighter, closer oneness of struggle, with a strange, octopus-like knotting and flashing of limbs in the subdued light of the room; a tense white knot of flesh gripped in silence between the walls of old brown books. (270)

間違いなく、二人の格闘は“the normal consciousness” (272) を遠ざける役割を果たしている。従って、二人の間で交わされる言葉は日常の意識の「蔽い」が取り払われている。“One ought to wrestle and strive and be physically close. It makes one sane.” (272) という Birkin の言葉は、「接触」が人を「健全」(“sane”) にするという彼の信念である。対象と「触れ合う」という行為が人の意識を取り払い、より本来の姿に近づけるということである。更に、彼の次の発言 — “We are mentally, spiritually intimate, therefore we should be more or less physically intimate too — it is more whole.” (272) は心の通じ合っている者どうしの肉体的接触は生の全体性へ至る道であることを暗示している。「親密になる」ことを意味する“intimate”は、他者の存在を前提としており、その異なる別々の個がそお互いの壁を越えて一つになることを意味している。それは個を否定することではなく、むしろ逆にそれぞれの全体性に近づくことである。この「接触」が二人に日常の意識的自己を忘れさせ、云わば、「自己による自己の呪縛」から解放される契機となっていることは間違いない。二人は今まで経験したことのない解き放たれた自由を味わっている。故に、Birkin は “one feels freer and more open now.” (273) と心が開かれ、Gerald も “Certainly” と応じている。“freer” や “more open” は我々が本来の生を「不自由な」、「閉じられたもの」にしているという彼の考えを反映している。肉体的な美しさを湛えている Gerald を見て口にする Birkin の “One should enjoy what is given.” というひと言には、生の全体性に無自覚に生きている我々の現状に対する無念な思いが潜んでいる。いずれにせよ、炭鉱の合理化という大事業を成し遂げて、精神的に活力を失っていた Gerald がこの格闘に我を忘れるほど没頭したことが彼を精神的苦境から救い出したのは事実である。“I feel better. It has certainly helped me.” (273) と、「肉体的に親密になった」(“physically intimate”) ことの効用を認めている。格闘が彼に “sensual” な “physical consciousness” を目覚めさせたのだ。

この格闘が日常の自己意識を捨てて、本来の自己を獲得する機会を彼に与えることになったのは紛れもない事実である。しかしながら、これも一時の出来事で、Birkin との “a bond” に自らを委ねることには躊躇い、結局、信頼するまでには至らなかった。彼の最後の悲劇的な結末は自分を抜きにして「自己」を考えられない近代人への作者の警告のように思える。

3. Hermione の知識欲

自己の殻を脱ぎ捨てきれない女性に対する Birkin の憎悪は Hermione に対峙する時、さらに強度を増す。彼女は物語の冒頭の章で紹介されているように、自分が地位や富の点で誰にも引けを取らない立場にある上に、思想や文化・芸術の世界でも受け入れられていることを知ってい

る。様々な分野の知識を鎧のように身につけ、自ら「弱みのない」（“invulnerable”,16）女になるべく努めてきた、イギリス中部地方の“a *Kulturträger*” (16) である。いわば、西洋的知性そのものが服を着て歩いているような人物である。Class-room という章で、Birkin が視学官として Ursula の生物学の授業を視察した時の場面である。たまたま Birkin の車を見かけたことで教室に入ってきた彼女と彼の間で教育を巡る議論が始まる。

“Do you really think, Rupert,” ... “do you really think it is worth while? Do you really think the children are better for being roused to consciousness?”

“They are not roused to consciousness,” he said. “Consciousness comes to them, willy-nilly.”

“But do you think they are better for having it quickened, stimulated? Isn't it better that they should remain unconscious of the hazel, isn't it better that they should see as a whole, without all this pulling to pieces, all this knowledge?” (40)

学校では無意識状態にある子供たちにものごとをバラバラに分析する方法を教え、意識を目覚めさせる。こうして彼らは対象を知識として頭に入れる。それよりも全体をあるがままに受け入れる方がよいのではないかというのが彼女の論点である。Birkin の反応は冷ややかであるばかりか、容赦ない。Prologue to *Women in Love* では二人は数年にわたって同棲しているが、この物語では別々の生活を送っている。しかし、Hermione は相変わらず、いつも付き纏って彼のそばを離れようとしなない。一方、Birkin は彼女と距離を置きたがっている。この激しいやり取りで見せる彼の態度はいつも身近に彼女を見てきた人間ならではの反応と言ってよい。彼は彼女との長い付き合いから彼女の本性を知り尽くしているのだ。

“But knowing is everything to you, it is all your life,” he broke out.

“Is it?,” she said.

“To know, that is your all, that is your life — you have only this, this knowledge,” he cried.

彼の “To know, that is your all, that is your life — you have only this, this knowledge,” という時の口調はよほど身近に親しく付き合った者のものである。時々、話の途中で Birkin が足を引っ張るような発言をするが、むしろそれに逆に刺激されたかのように彼女の口調は熱狂的になっていく。 — “Hadn't they better be anything than grow up crippled, crippled in their souls, crippled in their feelings —” (40) この発言は、当人を前にしていない我々読者は Birkin のものか Hermione のものか、ふと混乱してしまう。それほど考えが Birkin に似ている。おそ

らく、彼女は二人の生活の中で何度もこのような話を彼から聞いていたのであろう。とすると、皮肉にも Birkin は、頭でしか生きられない、一番期待できない人間に、「無意識のままにいる」(“remain unconscious”) ことの意義を説いていたのだ。いよいよ彼は最後通牒を突き付ける。— “What is it but the worst and last form of intellectualism, this love of yours for passion and the animal instincts?” (41) 彼女の情熱や動物本能礼賛こそ、“intellectualism” の最悪の形態だという辛辣極まりない彼の怒りの発言にもめげずに、彼女はこのような自説を続ける。— “never carried away, out of themselves, always conscious, always self-conscious, always aware of themselves.” (41) 彼女が指摘するこの「決して自分を忘れない」(“never carried away”) 状況は子供たちに限らず、我々の一般の日常の有り様であるが、彼が一番我慢ならないのは、この発言させているのが正に彼女の知的意識に他ならない点である。

彼女の“intellectualism”に対する彼の批判は Breadallby という章でも繰り返されている。ここで彼女の正体が露になる。彼女の屋敷に招待されている者たちの間で教育が話題になる時のことである。それぞれがそれぞれの意見を述べている時、Hermione が口をはさむ。“To me the pleasure of knowing is so great, so wonderful — nothing has meant so much to me in all life” (85) ... it is the greatest thing in life — to know. It is really to be happy, to be free.” (86) Class-room での動物主義発言とは全く矛盾する発言であるが、これが彼女の本性なのだ。彼女は自ら動物本能などと関わりをもつ気はなど毛頭ない。それを距離を置いて知的に観察することに心を躍らせているだけに過ぎない。彼女の言う“knowledge”の本質を見透かしている Birkin はすかさず立ちはだかる。— “You can only have knowledge, strictly,” ... of things concluded, in the past. It's like bottling the liberty of last summer in the bottled gooseberries.” (86) 彼の批判の主意は、彼女の知識が対象と一つになって得られたものではないという点にある。知識とは頭と身体の両方で得るものだとする西田の論⁴と通底する。沢山の招待客がいるために、二人のやり取りはここで終わっているが、彼女の自尊心が傷ついているのは間違いない。彼女の屋敷の宿泊客たちの行動に何かと支配権・主導権を握りたがる彼女の思い通りにはならない Birkin に、ついに彼女の怒りの矛先が向けられる。たまたま部屋を訪れた Birkin の背後から襲いかかり、文鎮で彼の頭を殴りつける。力みすぎて打ち損じた彼女のすきを突いて、森に逃げ込んだ彼は、衝動的に衣服を全て脱ぎ捨て、腰を下ろして横になったりして桜草やヒヤシンスの上を転がったり、奇妙な行動を始める。立ち上がって歩き始めると、もみの木やブナの木の花の枝が肌を突くように当たったりする。もはやここには人間の意識的な世界はない。正に彼の肉体の意識がいつもの意識の衣を脱ぎ捨てて、自然の命の息吹に触れている瞬間である。自分を取り戻した喜びに有頂天になっている Birkin に次のような思いが浮かぶ。

Nothing else would do, nothing else would satisfy, except this coolness and subtlety of vegetation traveling into one's blood. How fortunate he was, that there was this lovely,

subtle, responsive vegetation, waiting for him, as he waited or it; how fulfilled he was, how happy! (107)

草花や木々との「血のふれあい」によって“his own living self” (107) を取り戻し、すっかり「充足された」（“enriched”, 107）彼は「自分が根ざしている場所」（“where he belonged to”, … “where to plant himself”, 107）を悟る。そしてこれこそ“his place, his marriage place” (108) だと確信する。

Birkin は徹底的に彼女の発言を否定することで彼女の意志的な行為を妨害するが、理由は、彼女が外的な価値観にどっぷり浸かって生きているということ、そしてそのことに何の疑問も抱かずに、むしろそれを誇示して生きているという点にある。更に彼が我慢ならないのは、そういう自分の存在を他人に押し付けるがごとくに振舞っているという事実である。間違いなく彼女は知的な意識に搦め捕られた“visible”な女である。“a beyond”や“a bond”によって開示される地平は彼女には無縁の世界であると言わざるを得ない。

III 結語

以上見てきたように、この物語には個人としての自分を一步も譲れない、そのくせに他者を求めずにいられない人物たちが描かれている。“Flitting”の次の一節は Mino における、観念化した“I”/“you”を超えたところに“final I”/“final you”があるとする Birkin の主張に明確な輪郭を与えている。

In the new, superfine bliss, a peace superseding knowledge, there was no I and You, there was only the third, unrealized wonder, the wonder of existing not as oneself, but in a consummation of my being and of her being in a new One, a new, paradisal unit regained from the duality. … we are both caught up and transcended into a new oneness where everything is silent, because there is nothing to answer, all is perfect and at one. (369)

知識を超越した至福の平穏な世界では、分析的な理解を通して得られた知識は何の意味もない。ここには“I”/“You”といった観念的な個別化の表象もない。あるのは、ただ二元性から取り戻した“a new oneness”における、云わば、“a new One”/「第三の存在」⁵のみ。Apocalypse の次の一節は先に詳述した三人の問題の根底にあるものを照射している。— “To have an ideal for the individual which regards only his individual self and ignores his collective self is in the long run fatal.” (147) ロレンスはお互いの自己主張が他者との関係を困難にしているという考え

を終生もち続けた。Birkinの“*We're too full of ourselves.*” (44) という嘆きは作者のそういう思いを代弁している。ロレンスは自己の呪縛から解放される鍵を、アフリカの彫像やニューメキシコを訪れた時、大地の中心に向かって足を踏み鳴らしながら踊るメキシコ・インディアンたちに見た、あの「直観」、「衝動」、「血の躍動」といった、知的言語が尽くせない概念領域に求めた。Birkinが渴望したのは、原初への回帰ではなく、自己の更新であり、自己のうちに“*a beyond*”を宿した真の自己の獲得であった。“*a beyond*”、“*a bond*”、“*the unknown*”、そして「悟り」を思わせる“*a new One*”は仏教的世界観や老子の「道」と無縁ではない。

注

- ¹ Delavenay E. *D.H. Lawrence and Edward Carpenter: A Study in Edwardian Transition*. London: Heinemann, 1971. Delavenayは、ロレンスが *Women* や *Fantasia* を書くころまでにはヒンズー教や仏教などのインド思想に関する知識を得ており、Birkinの人物造形にも影響を与えていることを指摘している。
- ² Lawrence, D.H. *Psychoanalysis and the Unconscious and Fantasia of The Unconscious*, Cambridge: Cambridge University Press, 2014. 以下は *Fantasia* でロレンス自ら述べているように、この評論を執筆するころまでにはヨガや仏教に関する著作を読んでその世界観に強い関心を寄せていた。以下はその影響の一端を示すものであろう。“*I believe the soul of the dead in some way reenter and pervade the soul of the living: so that life is always the life of living creature and death is always our affair.*” (70)
- ³ 西田は第一編 純粹経験 第一章 純粹経験の冒頭でこのように述べている。
「経験するというのは事実そのままに知るの意である。まったく自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。」 (30)
- ⁴ 西田は第二編 実在 第一章 考究の出立点でこのように述べている。
「知識においての真理は直ちに実践上の真理であり、実践上の真理は直ちに知識においての真理でなければならない。」 (125)
- ⁵ ロレンスはこの「第三の存在」(the third being)という表現を詩、評論、小説などで頻繁に使っている。個人間、個人とそれを取り巻く世界、そして宇宙とのつながりを実現する神秘を表すものと考えられる。

引用文献

1. Lawrence, D.H. *The First Women in Love*. Eds. John Worthen and Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
2. Lawrence, D.H. *Psychoanalysis and the Unconscious and Fantasia of The Unconscious*. Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge University Press, 2014.
3. 西田幾多郎『善の研究』講談社学術文庫 東京：講談社、2017.
4. Lawrence, D.H. *Women in Love*. Eds. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
5. Lawrence, D.H. *Apocalypse*. Ed. with an Introduction and Notes. Mara Kalnins. London: Penguin Books, 1995.
6. Lawrence, D.H. 'The Two Principles' in *Phoenix II : Uncollected, Unpublished and Other Prose Works by D.H. Lawrence*, COLLECTED AND EDITED WITH AN INTRODUCTION AND NOTES BY WARREN ROBERTS AND HARRY T. MOORE London: Heinemann , 1968.

参考文献

1. Chen, Ellen M. *The Tao Te Ching*. St. Paul, Minnesota: Pagan House, 1989.
2. Yu-tang Lin. *The Wisdom of Lao Tzu*, independently published, 2004.
3. Spilka, Mark. *Renewing the Normative D.H. Lawrence A Personal Progress*. Columbia: University of Missouri Press, 1992.
4. LaChapelle, Dolores, *D.H. Lawrence Future Primitive*. Denton: University of North Texas Press, 1996.
5. 老子『タオ』加島祥造訳 ちくま文庫 東京: 筑摩書房、2015.
6. 莊子『内篇』金谷 治訳注 岩波文庫 東京: 岩波書店、2017.
7. 莊子『外篇』金谷 治訳注 岩波文庫 東京: 岩波書店、2016.
8. 鈴木大拙『禅の研究』 鈴木大拙全集第12巻 東京：岩波書店、1981.

